

メロンなかまをさがして

たなか かつのり
田中 克典
総合地球環境学研究所プロジェクト研究員

メロンなかまはどこを通ってきたか？

多民族国家から成るラオス、訪れたのは理由がある。筆者は日本で古くから食されてきたマクワ瓜、奈良漬けとして利用されている白瓜、これら二種類の瓜類の由来を研究してきた。学生のころ、マクワ瓜と白瓜を幾つか指導教官から渡され、栽培を始めた。収穫した果実はこと



さまざまな形態を示すマクワ瓜や白瓜。中央下と中央の長い果実が白瓜。他はマクワ瓜のなかま(撮影・加藤謙司)

のほか形態と果実の色が多様であった。これほど多様な果実であるが、驚かされたのは、これらが全てメロンのなかまだということである。メロンといえば、普段、市場で見かけるネットの入ったマスクメロンか、ハネデューメロンを思い出す。メロンは甘い果物だと思っていた。これに対して、マクワ瓜はほのかに甘く、子どものころ、母の実家でのどが渴いたといったときに出されたことを思い出す。白瓜は漬け物に利用するほどであるから、甘くなく、野菜として市場でときおりみかける。これら四つの作物が同じメロンとは思えないが、ネットメロンやハネデューメロンとマクワ瓜や白瓜とを交雑すると、種子ができて、次の世代も種子ができてから、確かに遺伝学的には全てメロンである。さて、マクワ瓜と白瓜、甘さも違い、用途も違うので、さぞDNAを調べたら違いがあるだろうと思った。しかし、これらふたつの作物は、調べた限りにおいてDNAの違いを見つけることができなかつた。つまり、マクワ瓜と白瓜は同じ道を辿りながら互いに交雑を繰り返してき



ルアンナムター県の朝市。畑や野山で収穫した動植物を販売する

たことで、遺伝的にはほぼ同質のメロンなかまが成立したことになる。さらに解析を進めたところ、インド東部のメロンに起源すると結果がでてきた。そこで、実際にインド東部からマクワ瓜と白瓜が伝播してきたであろう地域におい

て、メロンなかまの栽培の実態を探ろうと考え、ラオスまで調査旅行に赴いた。

ラオス北部での調査

ラオスでは世界遺産で登録されているルアンパバーン県、西北部のルアンナムター県、東部のサムヌア県とボンサヴァン県を訪れた。なお、後者二県はベトナム戦争の激戦地でアメリカ軍が投下した大量のナパーム弾の不発弾、破壊された遺跡や、旧共産党軍が宿営した洞穴など、戦争の爪痕が今も残っている。雨期の八月に訪れたところ、メロンが大量に販売されていた。ある地域では中国政府が整備したアスファルトの道路沿いに五〇メートルにわたりメロン



ルアンパバーン県の幹線道路沿いで販売されていた黄色いメロンなかま

なかまが並べられて、母親と子どもがメロンを販売していた。店を構えないで道路沿いで売っている人びとは農家である。彼らは、前日、メロンを収穫しているとのことであった。畑は歩いて三〇分から一時間ほどのところにある山の斜面に作った焼畑である。日本では梅雨の時期にマクワ瓜や白瓜を栽培するが、こちらも栽培状況は似かよっており、感慨深いものがあった。なお、ラオスで販売されていたメロンなかまは、マクワ瓜よりやや大きめであった。



焼畑で野草を収穫するモン族。焼畑には陸稲とさまざまな作物が混作され、野草も生える

情報がえられる現場

さらに驚かされたのはその用途であった。路肩のメロン売りがあるアスファルトの道路は物資の輸送や人の行来のために整備された幹線道路で、長距離移動の人びとがたびたび通る。インタビュウをしていると、バスや車が停まりなから人がヒョコッと顔をのぞかせていた。そのうち、人びとが降りてきて、メロンを二、三個買い始めた。家にもって帰るのかと聞くと、それだけではなく、道中のどが渴いたときやおなかですいたときにメロンを切って食すとのことであった。ナイフ一本あれば種をのぞき切りわけることが出来るので、お手軽な水筒代わりである。日本の高速道路のサービスエリアで水を買うのと同じ要領である。作物が伝播するには人に利用されてもち運ばれる必要があるが、ラ

オスにおいてメロンが受け入れられた背景のひとつに道中の飲み物として利用する習慣があるのかもしれないと思ひ、思わぬところで伝播のヒントをえた。この考えについて、滋賀県守山市の講演で話題に出したところ、幾人かの方から、「わたしらの若いころや今でもやけど、暑くてのどが渴いたときにはメロンを食べる」との声をいただいた。筆者自身も同じ経験をしているので、この意見に得心ゆくものがある。日本へのメロンなかまの伝播と飲み水とのかわりに因果があるとは断定できない。ただ、栽培現場でも講演でも、意見をうかがううえでどちらもフィールドであり調査の一環なのだと思う。なお、本調査は、平成二〇年度ジーンバンク事業における海外探索収集調査の一環でおこなわれた。